夜のくだもの屋 (3)

（「少女」は入院した友だちの見舞いの品を買うために、くだもの屋を訪れました。その店は、「少女」がコンクールのための練習で帰りがおそくなっていた頃、なぜか遅くまであかりをつけている店でした。）

小さな日よけをくぐり、声をかけようとして、少女は①思わず息をのんだ。

店の奥から、たのしそうなハミングが聞こえてくる。それも、あの故郷を思う歌、少女自身が何百回となく歌いなれた、コンクール課題曲のハミングが。

ルルルル、ルルル、ルルル……。

どうしてあの曲を、と思うよゆうもなく、少女は無意識に、※アルトの部分を口ずさんでいた。

大きな声をだしたつもりはなかったが、②目と鼻のさきだから、つつぬけに聞こえたのだろう。のれんをひょいとはねて顔をだしたのは、このあいだとおなじおばさんだった。

――おや、あんたでしたか！

いきなりそう言われて、③まごついた少女は、思わず頭をさげた。

――ありがとうございました。

毎晩のあかりのお礼のつもりだったが、これでは相手に通じまい、とすぐ思い、なんとか言いなおそうと考えていると、④あんがいにも、すらりと返事がかえってきた。

――いいえ、どういたしまして。

話が通じたことでかえってびっくりして、あとのことばがつげないでいると、おばさんはつづけて、

――毎日おそくまで、ほんとにたいへんですねえ。いえね、毎晩毎晩、いい声で歌をうたってとおんなさるでしょう。お顔もなにも知らないんだけど、でも、うちのおやじさんがね、若い娘さんがこんな暗い夜道を帰るのはさぞ心ぼそいだろう、せめてうちの店のあかりだけでもつけといてあげれば、って言いましてね。それで、毎晩、歌の声がとおりすぎてしまうと、ああもう安心だと思って、まあ、それを合図みたいにして店をしめてたんですよ。毎日のことだもんで、わたしまでその歌おぼえちゃって、ほっほ。でも、このごろは、いつまでたっても歌が聞こえないもんで、どうしなすったかと思ってたんですよ。

少女は、ふたたび、声もなかった。⑤この店のあかりがあんなにあたたかく見えたのは、当然だったと思う。コンクールが終わってからは早く帰れることを話し、少女はもういちど頭をさげた。

――もっと、もっと、たくさん買いたいんだけど、友だちと予算をきめちゃったもんで、ごめんなさい。

とんでもない、とわらいながら、おばさんがきれいにリボンをかけてくれた包みをかかえ、少女は、病院にいる友だちのために、このくだものよりもなによりも、いちばんお見舞いになるみやげ話ができたと思った。

（杉みき子『小さな町の風景』偕成社　所収「夜のくだもの屋」による）

※アルト…声楽で、女声の低い音域。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「思わず息をのんだ」とあるが、このときの心情として適当なものを選びなさい。

ア ためらい　イ 驚き　ウ 納得

〔　　〕

(2) ――線②「目と鼻のさき」の意味を選びなさい。

ア 距離が極めて近いこと。
イ 見通しが立つこと。
ウ 非常に賢いこと。

〔　　〕

(3) ――線③「まごついた」とあるが、「まごつく」の意味を選びなさい。

ア 決心がつかずにためらう。躊躇する。
イ お礼の気持ちを示そうとする。感謝する。
ウ どうしていいかわからずうろたえる。当惑する。

〔　　〕

(4) ――線④「あんがいにも、すらりと返事がかえってきた」とあるが、すらりと返事がかえってきたことをなぜ「あんがいにも（案外にも）」と思っているのか。適当なものを選びなさい。

ア くだもの屋のおばさんが、自分のコンクール課題曲を知っていたから。
イ 毎晩くだもの屋のあかりがともっていたのは、夜道を心配してのことだったから。
ウ 事情を説明せずにお礼を言ったので、話が通じないだろうと思っていたから。

〔　　〕

(5) ――線⑤「この店のあかりがあんなにあたたかく見えたのは、当然だったと思う」のはなぜか。最も適当なものを選びなさい。

ア あかりは、自分を気づかってつけられていたものだったから。
イ 夜道でも、あかりのおかげで安心して帰ることができたから。
ウ 入院している友だちに、みやげ話ができたと思ったから。

〔　　〕